英語と国際理解

田　矢　一　夫

1．はじめに

平成4年、大学設置基準の見直しは、大学における現行のカリキュラムの検討を示唆した。それに基づき、各大学ではカリキュラムの改編を模索中である。少なからぬ大学では学部の再編問題まで起っている。各大学で最も共通の話題となっているものの一つに外国語がある。本学では教育学部の先生方の中に、話せる英語の学習を取り上げてほしいという声が大きい。

私は、本紀要に英語の専門家でない自分自身の体験を報告した。[1]その中で、一応、“よみ”・“かき”のできる大人が、幼児程度の会話力しかない不思議さを指摘されたことについて述べた。生れて初めての外国がカナダであった。専門の化学に関する読み・書きで積んだ多くの経験を頼りに「会話の勉強はしなくても何とかなるだろう」というのが私の考えであった。事実、何とか日常生活をこなすことができたのであるが、前記の指摘は、私にとり、まさに青天の霹歴であった。

明治維新以来、日本が西欧文化を摂取・吸収するためには外国語の学習は必須であった。書物などの解読によって理解し、咀嚼することがとくに役に立った。「西欧に追いつけ」が昭和20年以前の英語教育に大きく影響した。もっとも、この状態は今でも部分的には変わらずに続いている。最近では、電車やバスに乗ると必ずといえるほど外国人を目にする。彼等がどのようなルートで、かくも多数に来ているかは不明である。しかし、日本に大勢の外国人が現在いるということは厳然とした事実である。その数

も増加の一途を辿っている。

一方、現在の日本の世界における位置づけは、多数の日本人が外国で活躍することを必然とした。いくつかの分野では、日本が開発した技術などのknow howを外国、とくに発展途上国に移植することにさえなった。これらの客観的状勢から、話すことの意義は有形・無形に切実さを持つに至っている。

2．引っ込み思案は三文の損

外国人との会話がスムーズにできない理由の一つに、shyがあげられる。私の感じでは、国の内外を問わず、最近の日本人の行動を観察する限り、とてもshyとは思われない。とくに外国では、同じ仲間として恥ずかしくなる行為を平気で行っている実例に何度もぶつかった。これらは日本の常識は世界の非常識の例かと思う。真面目な意味で、“こんなこと言うと笑われはしないか”、“文法的に間違っていないだろうか”などの理由で会話をためらうことも事実である。

昭和20年代のはじめ、今の通勤ラッシュ並みの混雑の中（ただし、窓という窓のガラスはすべて割られ、すべての座席には土足のまま乗客が立っていた。これが当時の通勤電車のごく当り前の状態であった。）ふと気づくとG. I.がそばに居た。G. I.とはGoverment issue（官給品）の略で兵士が日常の生活を官給品で賄うことから、兵士達をそう呼ぶといわれる。そのG. I.に、私はDid you landed on Okinawa?と聞いた。彼はYes、ただし、戦斗が終ってから上陸したと答えた。彼の答えを聞いているうちに、私は間違いに気付いた。これは四十数年を経た今でも鮮明に記憶に残っている。新幹線が開通して数年を経た頃、車内でスワローズ（当時は国鉄スワローズ）の黒人名三塁手ロビンソンらしき人が側にいた。その日の試合の結果を彼に尋ねた。そのやりとりの中で、splitという言葉があった。私

の直感では引き分けかと思って話をしていた。そのうち、それはダブルヘッダー（当時はよくあった）が1勝1敗であったことを、両手の人差し指を立てて説明してくれた。外国人とはこのようなpossitiveに相手に呼びかけることによって、勘違いや早合点などで多くの失敗をした。しかし、得たものはもっと多かった。前述した傍若無人の行為をとる、というpossitiveな態度を外国人との意志の疎通に持込んだら、眉をひそめるだけの彼等の我々を見る目が違ってくるかも知れない。とくに、西欧では自分の意見は強く主張するが、日常の社会生活では常に相手に迷惑をかけぬようにという気配りを人々に感じる。

3．英語は世界の共通語

私たちと交流する外国人の大多数は英語を母国語としない人達である。しかし、中国本土から来る人達の大部分を除くと、英語を仲立ちとして意志の疎通が行われている。すなわち、英語を母国語としない諸外国の人々と仕事や日常の話をするとき、ほとんどの場合に英語が使われる。また、彼等同志でも国が違えば英語で意志の疎通を行っている。英語は最もよく使われる万国共通語である。ウインザー大学で、私のオフィスに来た2人のインド人が英語で話しをしていた。私が日本人的感覚で、なぜインドの言葉で話さないのかと理由を聞くと、インドでは多数の言葉が使われており、大別して9つの言葉があるとのことで、2人は互に違う言語圏の人達であった。そして、英語が2人の共通語であったのである。

JICA（Japan International Cooperation Agency）からタイ国に派遣されたときのことである。事前のオリエンテーションで、英会話が不自由であると、仕事の実力があってもcounterpart（派遣先での先方の担当者で、仕事の協力者であり交渉相手でもある）、その他の人々に軽視されることがあるといわれた。東南アジアの国々や台湾などでは、大学は英語で

講義を行っているところもある。また、アジアの国々では、最も優秀な人材はアメリカや西欧に留学し、その次のランクの者が日本に来るといわれる。私の親しくしているタイの文部省の高官も、息子を日本に留学させたいと言っていたが、結局2人の息子はアメリカに行った。

4．native tongue 以外の人との英会話

ところで、英語を母国語としない人と英会話をするとき、私は非常に気楽にやれる。perfect 英語を話す（できない相談であるが）よう神経を使わなくてすむからである。私の子供の頃（昭和10年代の中頃まで）、多数の朝鮮人が日本に来ていた。私の知っている人達は自由意志で来ていて、内地（本州のこと）での生活状態はまあまあであった。勝手に仕事も変え、中にはアルバイトしながら学校に通うものも少くなかった。上手・下手の個人差はあっても、彼等の多くは日常のことは勿論であるが、デリケートな日本語も使えた。私が子供であったためか、朝鮮独立のために勉強していると抱負を述べた者もいた。しかし、どんなに日本語の上手な者でも、native tongue の私から見ると、おかしなところが少なからずあるのが常であった。50年以上を経た現在でも、同じことが言える。テレビその他で多くの外国人が極めて日本人らしい、あるいは、みなの日本人以上の日本語を話す人が多数いる。しかし、そのような人達にも、native tongue の我々からすると、常におかしな個所が沢山ある。所詮、外国人に perfect 日本語は無理であり、自分の native tongue 以外の言葉を perfect に使うことはできない。こう考えると、英語を母国語としない人達との会話は、至らない者同志の英会話である。私が気楽になる所以である。皆さんにもこの流儀をお薦めする。

ストラスブールに滞在していたときのことである。オペラを見に出かけ、例によって気楽に話しかけた女子学生が、意外に上手な英語で応答し

た。“お前はフランス人にしては珍しく英語ができる”とほめたところ、“私は一週間前にブリティッシュコロンビア大学から来たばかりのカナダ人だ”といわれて大笑いとなった。多くのフランスの学生は我々と同様に英会話が苦手である。わざと使わないという説もあるが、できない者が多いというのが私の体験である。ボルドーでは、彼なら英語が話せるといって、わざわざ友人を呼びに行くグループにも出会った。

5．英語の発想で

前述の論文[1)]にも書いたように、日本語の発想でなく英語の考え方で英語の勉強をすることが大切である。手紙を受取るはreceiveであるが、論文を受理する（審査に合格ということ）は、acceptである。日本語の受理は上記の両方を意味することもあり、曖昧である。英語では厳密に区別する。評価するという言葉を和英辞典で引くと、appraise や value がまず出てくる。ところが、英語を母国語とする人から、これらの単語を聞いたり、論文や手紙の中に見たりすることはほとんどない。その代わりに彼等は、appreciateをよく使う。英和辞書には、第１の訳として真価を認めるとでている。おわり頃に［古］評価するとある。和英で引ける言葉は日本語を直訳したもので、和英からappreciate. 引出すのはむずかしい。ではどうすればよいか。答は、彼等の論文・文通したときなどの手紙・会話などの事例をできるだけ多く集め、それらをT. P. O.により応用していくことである。根気がいるが、パソコンなどを利用して整理することも可能であろう。そもそも語学の学習には根気が必要である。

私自身は、未だに下手な作文・会話しかできないが、それでも論文を書くときはつぎのようにしている。まず論文の内容に応じて構成を考える。章立て、節立て、小見出しなどである。ここまでは和英に関係ない。化学ではそれらを英語にするのは容易である。問題は、それらの肉付け、すな

わち文章を作るときである。私は、まず、日本語を書き、それを英訳することはしない。文章を、はじめから英語で練るのである。そのとき、前述の事例が役に立つ。英語の発想で書かないと、折角の立派な内容が審査員に正確に伝わらず、論文が却下される例もある。英語の発想に馴まない文章は、文法的に間違いがなくても、素直に読めない、おかしな文章として、それを掲載する雑誌の評価にも関係するからであろう。勿論、内容がよければ却下の前に英文を直せと指示してくることもある。これを何回か繰り返して英語らしくなって行くのである。会話の時も同じで、日本語の会話を組み立てずに、無意識に英語が口から出てくるように勉めている。日本語でもごく普通の会話は、あまり深く考えなくても、つぎつぎと言葉が出てきて、話が続くのである。

6．おわりに

これから述べることは、これまでに書いて来たことと反対の内容のものである。JICAから何回か途上国に派遣された鉱山技師の話である。事前研修には英語の学習も含まれる。内容は日常の会話、新聞記事などの教材のヒアリングや書きとりなどである。研修者を3段階のランクに分けて、これらを行う。海外での技術指導の経験が深いにも拘らず、この技師は、英語力のランクは一番下であった。彼自身は、この件について動ずることのない豪傑であった。派遣された現場でどうするかというと、ずばり、日本語で指導するそうである。相手は、嫌でも日本語をわかろうと努力する。なにしろ、先生が日本語で技術指導をするのであるから。派遣した専門家が日本に帰ると、JICAではほとんどの場合に、counterpartを日本に留学させる。その時、この日本語での指導が役立つことになった。専門家から英語で指導を受け来日した他のcounterpartsより、はるかに日本での研修の成果が上がったのである。

英語は相互理解の共通語であるが、お互いがいわば、第三者である英語という手ぶくろをはめて握手しているようなものである。手ぶくろの上からでは、互いの温さは伝わりにくい。お互いの国の歴史・文化を理解しようとする場合も同様であろう。相手との意志の疎通が、英語である程度可能であると、つい英語でのやりとりとなる。自分は相手の言葉で、相手は私の言葉の日本語で語り合えたら、最高ではなかろうか。タイでの半年の滞在の終わりに、私は教員養成大学の先生方に英語で挨拶をした。ほんの一部をタイ語でやったが、今では、ほとんど忘れてしまった。タイ文字も多くを忘れたので、今でも覚えている部分をローマ字で記す。

pom put pasa tai, kun put pasa ipun
(私はタイ語で語り、君達は日本語で語る)

第5世代のコンピュータを待つまでもなく、先日、日本語の会話を英語・ドイツ語に直すコンピュータの試作について、TVで放映していた。言語は文化で、言葉の勉強は、それの母体となるその国の文化の研究にも繋がり、国際交流にも係わる。言語教育にもいろいろなapproachの仕方があるというのが結論である。

参考文献

1）田矢一夫　“専門家でない私の北米大陸における英語体験”「言語と文化」第4号 105～111頁　1991年